

コバンザメは死なず？

酒井 寿紀 (Sakai Toshinori) 酒井 IT ビジネス研究所

虎が野に放たれた！

前号の本コラムに、IBM のメインフレームの CPU だけを入れ替える PCM

(Plug-Compatible Mainframe=コバンザメ)が 1970 年代以降盛んになったと記した。しかし、状況は 21 世紀を迎えて激変した。

前号に記したように、1956 年に IBM に下された同意判決が PCM を裏で支えてきた。しかし 1996 年に米国政府は、この同意判決を、5 年の猶予期間を置いて最終的に 2001 年に完全に終了させると発表した。IBM にとっては、実に 45 年振りに足かせが外れたのである。虎が野に放たれたのだ。

そして、IBM は 2000 年に、z シリーズという新しいメインフレームを発表し、そのオペレーティング・システム(OS)である z/OS は IBM の CPU 上でしか使えないことにした。この決定は PCM ビジネスの可能性を根本から否定するものだ。

そして日立と富士通（1997 年に、共同で PCM 事業を進めてきたアムダールを買収）は、2000 年に相次いで PCM 事業からの撤退を表明した。

両社の PCM からの撤退には、IT の市場全体に対するメインフレームのウェイトの低下、z シリーズの 64 ビットアドレスに追従することの技術的困難さも大きく影響していると思われる。

こうして、1980～1990 年代に繁栄した大型機の PCM ビジネスは市場から消え去った。

新種コバンザメが出現！

ところがこれと前後して、汎用マイクロプロセッサを使った CPU 上で、「エミュレータ」というソフトによって IBM のメインフレーム OS を動かす別種の PCM が続々と出現した。コバンザメの新種が現れたのだ。

その一つが、1999 年にアムダールからスピンオフして設立された PSI (Platform Solutions, Inc.)である。しかし、2006 年に IBM は、エミュレータに必要な特許契約の更新を拒否した。その後両社はお互いに相手を告訴していたが、2008 年に IBM は PSI を買収してしまった。訴訟問題解決のために使われる最も手っ取り早い手段だ。

また、FSI (Fundamental Software, Inc.)もマイクロプロセッサ用のエミュレータを提供していた。しかし、やはり 2006 年に IBM に特許契約を打ち切れ、これを継続できなくなった。

そして T3 テクノロジーズは、2000 年以降、前記の FSI や PSI のエミュレータを使った中小型の PCM を販売していた。しかし、これらのエミュレータが使えなくなり、T3 は PCM の新規販売が不可能になった。同社は IBM を米国および EU で告訴している。

また、「Hercules」というエミュレータが 1999 年から無料で公開されていたが、2009 年に、これをベースにした「Turbo-Hercules」という有料のソフトを提供する企業が設立された。同社も IBM を告訴している。

なぜこのような小型コバンザメが時を同じくして多数現れたのだろうか？

IBM は近年、中小型メインフレームの販売を止めてしまった。しかし、大型メインフレームのユーザーには、ソフト開発用やバックアップ用に、性能は低くてもよいが大型機と同じソフトを使えるシステムに対する要求がある。また、大企業の一部門や中小企業にも同様なニーズがある。

一方、エミュレータ方式を使うと、CPU の本来の実力より性能が 1 桁近く落ちるが、近年の汎用マイクロプロセッサの急激な進歩によって、それでもメインフレーム並みの価格／性能比を実現できるようになった。

このような状況から、エミュレータ方式の新種コバンザメが続出したのだ。

なぜ米国政府と IBM が豹変？

米国政府が IBM に対する政策を方向転換したのはなぜだろうか？

1950～1980 年代にかけて、IT の世界で、米国政府の独禁法上の最大の関心事は IBM だった。しかし、1990 年代以降、関心の対象はマイクロソフトからグーグルへと大きく移っていった。メインフレームの独占の弊害はもはや国家経済を揺るがすほどの問題ではないと判断したのだろう。

そして、今回の IBM の豹変は、政府の

この政策変更によるものだ。しかし、法的に許される限り、競争相手をつぶしてでも売り上げを増やそうとするのが株主に対する経営者の責任なので、IBM でなくとも同様な手段に出ただろう。

それにしても、新種コバンザメはどれも生まれたての赤ん坊のようなもので、IBM の敵ではないのに、同社はなぜ全力を挙げてこれをつぶそうとしているのだろうか？ それは、新種コバンザメが将来どんどん成長し、増殖することを恐れているためだと思われる。汎用マイクロプロセッサの性能は今後も向上するので、やがてエミュレータ方式の性能は大型のメインフレームにまで手が届くようになるだろう。そうなれば、この市場に大企業も参入してくる恐れがある。現に前出の PSI は、一時ヒューレット・パカードが買収を検討したという。そのため、今のうちに叩き潰しておいた方が安全だというのが IBM の考えではなかろうか？

しかし、エミュレータ方式の PCM には前述のようなニーズがあり、これを排除することはユーザーの利益を損なう。そして、現在は米国政府以上に EU が独禁法違反に目を光らせている。また、新種コバンザメは、1 匹では力不足なので、連携して活動している。したがって、コバンザメの生存をかけた闘争は今後もまだ続きそうだ。